

産後ケア 母子を支援

不安解消へ必要な場

施設再開「応援に胸熱く」



入所者の自由帳に目を通し、会津助産師の家の活動を振り返る二瓶さん

5人の助産師が交代で24時間ケアに当たり、母子と生活を共にしてきた。都助産師会からの助成が打ち切りになった昨年6月以降も、地元の女性団体からの寄付など支援を受けて運営を継続してきたが、運営資金の確保は難しかったという。二瓶さんは「出産後のお母さんは疲れ切っている。いろいろな不安を抱えている。ゆっくり休める場所と時間が絶対必要。46組の母子と接する中で、その思いと資金面

会津助産師の家・代表の二瓶さん

けの子育て講座など新たな取り組み

震災後、放射線不安などの悩みを抱える母子に安らぎの場を提供しようと会津若松市に開設された会津助産師の家「おひさま」。昨年6月の閉所が決まっていたが、存続を望む母親や地元団体からの声に押されて今月、移転先の猪苗代町で再スタートを切った。代表の二瓶律子さん(70)は「何度も諦めかけた

46組の母子を受け入れた。閉所せざるを得ないのかという葛藤があつてずいぶん悩んだ」と振り返る。施設を存続させるため、二瓶さんらは行政にも働き掛け続けた。県や市の窓口に運営資金に悩む施設の状況を知らした県民から存続を望む多くの声が寄せられて、このことを聞き、「施設をめながら話した。

あの人は今

東日本大震災と東京電力福島第一に喜れた人がいる。その人たちを取り合って前に歩み出した人たち